

『デジタルで読む脳 X 紙の本で読む脳』

立ち読み

第一の手紙

デジタル文化は「読む脳」をどう変える？……………6

第二の手紙

文字を読む脳の驚くべき光景……………25

脳の可塑性・専門化・音速の自動性

三つの円形舞台サーカス……………巨大なテントの下で／注意のスポットライト／

視覚のリング／言語のリング／認知リング・感情リング

第三の手紙

「深い読み」は、絶滅寸前？……………51

文中には何がある？……………注意の質

深い読みの喚起プロセス……………心象の力

共感——他人の視点になる

背景知識

深い読みの分析プロセス……………類推と推論／批判的分析

深い読みの生成プロセス

第四の手紙

これまでの読み手はどうなるか……………96

読みのすべてをつなぐデジタル・チェーン……………どれだけ読むか／どう読むか／

何を読むか／どう書かれるか

自分を実験台にして……………最後の環——なぜ読むのか

第五の手紙

デジタル時代の子育て……………144

注意散漫な子どもたち……………バツタの心／記憶への影響

外部の知識源への依存

読み方は考え方を変え、考え方は読み方を変える

## 紙とデジタルをどう両立させるか……………174

ひびのすぎ間で——最初の二年間……読んでいるとき、からだはどう反応するか  
二歳から五歳まで——言語と思考がともに飛び立つとき  
ガマノコシカケと物語の秘密の言葉  
画面モードに設定されてしまう前に  
つながるべきか、つなげざるべきか——問題は、どれを、いつ  
将来の準備  
急ぎすぎないで

## 読み方を教える……………204

どこから始めるか……子どもたちに何が必要かを見つける／  
教師が知っておくべきこと／あらゆる学年で、あらゆる分野で

## バイリテラシーの脳を育てる……………227

子どもの発達へ向けた提案……印刷媒体のたいせつな役割／デジタルの知恵  
三つの大問題……第一のハードル——媒体がおよぼす影響の調査／  
第二のハードル——専門家の研修・育成／  
第三のハードル——利用機会と関与の格差  
注意、記憶、接続、推論、分析、そして跳べ！

## 読み手よ、わが家に帰りましょう……………255

観想・熟考の生活……喜びの時間／社会的利益のための時間／知恵の時間  
読書と良い読み手の未来

謝辞 280 クレジット 289 解説 290 \*文中、「」は訳者の注記です

\*本書の「注」は [www.intershift.jp/yomu.html](http://www.intershift.jp/yomu.html) よりダウンロードいただけます

# デジタル文化は「読む脳」をどう変える？

フィールディングは数段落ごとにあなたを呼び止める

まるであなたが本を閉じていないことを確かめるかのよう

そしていま、私があなたを再び呼び出して

ひたむきな幽霊、暗く静かな人影が

この言葉のとば口に立っている

——ピリー・コリンズ（強調筆者）

親愛なる読者へ

あなたは私の言葉のとば口に立ち、私たちはともに、これから数世代にわたる途方もなく大

きな変化の出発点に立っています。これから読んでいただく手紙は、読字と読字脳に関する一連の意外な事実について考えようという、私からのお誘いです。その事実の意味するところは、あなたと、次世代と、おそらく全人類の、認知作用の重大な変化につながります。私の手紙は、ほかのもっと微妙な変化にも目を向けて、あなたがかつて慣れ親しんでいた読み方からいつのまにか離れてしまっていないか考えようという誘いでもあります。ほとんどの人にとって、その変化は始まっているのです。

まず、この一〇年にわたる私の読字脳に関する研究の出発点となった、一見単純に思える事実から始めましょう。人類は誕生時から字が読めたわけではない。読み書き能力の獲得は、ホモ・サピエンスの遺伝子を超越した最も重要な功績のひとつです。その能力を獲得した種は、知られている限りほかにいません。読字を学習する行為は、ヒトの脳のレパートリーにまったく新しい回路を加えました。読字学習の長い発展的プロセスは、その回路の接続構造そのものを深く十分に変化させ、そのおかげで脳の配線が変わり、人間の思考の本質が変容しました。

私たちが何を読むか、どう読むか、そしてなぜ読むかが、私たちの考え方を変えるのである。その変化はいまも続き、しかもペースが速まっています。読字はわずか六〇〇〇年のあいだに、個人および文字文化の知的発展にとって変革の触媒になりました。読字の質は思考の質の指標であるばかりか、人類の脳の進化において、まったく新しい経路発生への最もよく知

られている道でもあります。読字脳の発達と、その最新の進化バージョンの特色となつて加速する変化によつて、危機に瀕しているものがたくさんあります。

あなた自身を省みるだけで十分です。画面<sup>スクリーン</sup>やデジタル機器<sup>デバイス</sup>の字を読めば読むほど、自分の注意力の質がどれだけ変わってきたか、すでに気づいているかもしれないですね。かつての愛読書に没頭しようとするとき、何か微妙なものが欠けている心の痛みを感じたことがあるかもしれません。幻肢「事故などで手足を失つても、まだ存在していると感じられること」のように、読み手としての自分がどうだったかを覚えているのに、読書に夢中になる喜びとともに、あの「ひたむきな幽霊」を自分の外の世界から内面的な空間へと呼び出すことができませぬ。子どもの場合はさらに困難です。けつして知識として蓄積されないような刺激で、子どもたちの注意はたえずそらされます。つまり、字を読むときに類推や推測を行なう能力の基本そのものが、しだいに発達しなくなることです。いまも若い読字脳は進化していますが、必要とされるもの以外読まない、というか必要なものさえも読まずに、「I didr (too long didn't read)の略…長すぎたから、読まなかった」で済ます若者が増えているのに、ほとんどの人々に関心は広がっていません。

デジタル文化へとほぼ完全に移行するなかで、私たちはそれが史上最大の爆発的な創造と発明と発見がもたらす予期せぬ付随的結果とは気づかないまま変化しています。これから読んでいただく手紙で詳述するとおり、もし私たちが、進化する読字脳に現在起きている、そしてこれから数年間で別のかたちで起こるかもしれない特定の変化に注意を向けるなら、警戒すると同じくらいワクワクするはずです。なぜなら、読み書き能力<sup>リテラシー</sup>ベースの文化からデジタル文化への移行は、これまでのコミュニケーション形態の移行とは根本的に異なるからです。そして以前とは異なり、私たちの読み方——ひいては考え方——の潜在的な変化を特定する科学もテクノロジーもありますから、そのような変化が人々に完全に定着し、受け入れられる前に、その影響を理解することができます。

こうした知識の構築は、変化し続けるテクノロジーが、デジタル様式の読字をより精緻にしようとするとき、あるいはそのために脳の発育上ハイブリッドな別のアプローチを開発しようとするとき、みずからの弱点を補うための理論的基盤になります。したがって、さまざまな読字の形式が認知作用や文化に与える影響について、私たちに何が学べるかは、次世代の読字脳にとって深い意味をもっています。態勢が整えば、私たちはより賢く、より多くの情報をもとに、子どもたちや子どもたちの子どもたちの変化する読字回路の形成を、助けることができます。

私は訪ねてきた友人にするように、あなたを読字と進化する読字脳に関して私が集めてきた考えへと案内します。読むとはどういう意味かについて、みなさんとのやりとりに期待半分、

喜び半分です。どうして読むことが私にとつてそれほど重要になったか、その話から始めましょう。たしかに、私が読み方を学んでいる子どもだったとき、読むことについて考えていませんでした。アリスのように、ただ不思議の国に通じる読書の穴に飛び込んで、子ども時代のほとんどは消えていました。うら若い娘だったときも、読むことについて考えていませんでした。ただ、事あるごとに『高慢と偏見』の『エリザベス・ベネット』や『ミドルマーチ』の『ドロシア・ブルック』や『ある婦人の肖像』の『イザベル・アーチャー』になっていました。ときには、『カラマゾフの兄弟』の『アリョーシャ』や『魔の山』の『ハンス・カストルプ』や『ライ麦畑でつかまえて』の『ホールデン・コールフィールド』のような男性になることもありましたが、それでも、いつも私はイリノイ州エルドラドという小さな町から遠く離れた場所へと舞い上がり、ほかでは想像できないような感情で熱く燃えていました。

文学部の大学院生だったときでさえ、読むことについてあまり考えていませんでした。むしろ、リルケの『ドゥイノの悲歌』（岩波文庫）やジョージ・エリオットとジョン・スタインベックの小説のあらゆる言葉、あらゆる込められた意味を読み込み、世界に対する知覚が鋭く研ぎ澄まされ、そのなかで自分の責任を果たそうと躍起になるのを感じていました。

自分の責任を果たすことに関して、第一ラウンドはみじめな、そして記憶に残るほどの失敗に終わりました。薄っぺらな心構えの若い教師にもてるかぎりの情熱を胸に、私は数人のすば

らしい教師志望仲間とともに、平和部隊のような仕事をハワイの田舎で始めました。そこで毎日、二四人の言いようのないすばらしい子どもたちの前に立ちました。彼らは信頼しきつて私を見ていましたし、私たちは互いに全面的な好意をもっていました。子どもたちの家族には読み書きできない人が多く、私が手伝って子どもたちが読み書きできるようになれば、彼らの人生の軌跡を変えられるという事実には、しばらくのあいだ子どもたちも私も気づいていませんでした。そのあとようやく、私は読むということが何を意味するかについて、真剣に考え始めたのです。そこで私の人生が一転しました。

突然、はつきりくつきりと、読み書き能力にもとづく文化の一員になるという一見単純なことができるようにならない場合、子どもたちがどうなるかが見えました。彼らは読書の穴に落ちて夢になる生活の、すばらしい喜びを経験することはありません。恐竜の島ダイノトピアやホグワーツ魔法魔術学校、小人の住む中つ国や貴族の館ペンバリーを発見することもありません。自分の小さな世界に入りきらない壮大な考えと、夜どおし格闘することもありません。

『パーシー・ジャクソンとオリnposの神々』の『盗まれた雷撃』や『マチルダは小さな大天才』の『マチルダのような登場人物について読んでいるうちに、自分自身がヒーローやヒロインになれると信じるようになる、すばらしい変化を経験することはありません。そして何より重要なこととして、自分の外の世界と新たに出会うことから生まれる、思考の無限の可能性を経験するこ

ともないでしょう。一年間教えてきたこの子どもたちは、もし読むことを覚えなければ、人間としての潜在能力をフルに発揮することはない、と突然一気に気づいたのです。

その瞬間から、私は読むことが個人の人生を変える力について、真剣に考え始めました。当時の私は、書記言語の深い生成性と、それが子どもだけでなく社会にとつても、新しい思考の生成に——文字どおりにも生理学的にも——どういう意味をもつか、ちつともわかかっていませんでした。さらに私は、読字に必要な並はずれた大脳の複雑さも、どうして読むという行為がほかの機能と異なり、視覚や言語のようなもともと遺伝的にプログラムされた能力の範囲を超える脳の半奇跡的能力を生かせるのかについても、まったくわかっていませんでした。この手紙でもそうですが、それはあとからやって来ました。私は人生計画すべてを改め、書かれた文章を楽しむだけでなく、その根底にある科学へと踏み出したのです。そして、人間がどうやって書き言葉を習得し、書記言語を自分自身と将来世代の知的発達のために利用するのか、理解することを目指しました。

私は振り返りませんでした。ハワイのワイアレアの子どもたちを教えるから数十年が過ぎており、彼らはいまでは自分の子どもをもうけるまでに成長しています。彼らのおかげで私は認知神経科学と読字の研究者になりました。具体的には、字を読むとき脳は何をするのか、なぜほかの人より読み方を覚えるのに苦勞する子どもと大人がいるのかについて、研究していま

す。子どもの貧しい環境のような外的原因から、ひどく誤解されているディスレクシア（読字障害）という現象における脳の言語機構の差異のような生物学的原因まで、さまざまな理由があります。しかしそれは私の研究の他方面のテーマであり、本書ではちらつとしか登場しません。

これから読んでいただく手紙は、読字脳に関する別の方向の研究に関係しています。つまり、その根底にある生来の可塑性であり、それには誰もが影響を受ける意外な意味があります。私が初めて読字回路の可塑性の関与を漠然と感じるようになったのは、一〇年以上前、わりと範囲の狭い仕事になると思っていたことを始めたときでした。研究者として、人間の発達に対する読字の貢献を『ブルーストとイカ——読書は脳をどのように変えるのか？』（インターシフト）という本で説明しようとしていたのです。もともとの意図は、読み書き能力発達の大きな流れを述べたうえで、ディスレクシアの新たな概念化を行なって、言語にまつわる脳の組織の異なっている者が人から理解されないうとき、無駄になることが多い脳の豊かな能力を描写することでした。

ところが、その本を書いているあいだに予想外のことが起こりました。読むことそのものが変化したのです。書記言語の発達について、認知神経学者であり発達心理学者である私が知っていることが、私だけでなくすべての人の目の前と指の下で変わり始めました。私は七年間、シユメール人の書記体系とギリシャ文字の起源を研究し、脳画像データの分析に自分自身の

脳をほぼ埋没させていました。それを終えたとき、頭を上げて周囲を見ると、自分がリップ・ヴァン・ウインクル（ワシントン・アーヴィングの短編小説の主人公。森で眠って目覚めると世界がすっかり変わっている）になった気分でした。六〇〇〇年近い歴史のなかで脳がどうやって読字を覚えてかを説明するのにかかった七年で、読字能力をベースとする文化全体が、まったく異なるデジタルベースの文化へと変容し始めていたのです。

私は打ちのめされました。著書の前半の歴史に関する章を書きなおして、いま起こっているデジタル文化への移行が、ギリシャの口承文化からそのみごとに書記文化への移行と、驚くほど似ていることを示しました。とても心の広い古典学者の同僚、ステイーヴン・ハーシュの指導のおかげで、これは比較的簡単でした。しかし、すでに慣れて上手に字が読める脳の研究を用いて、次の適応を予測するのはけっして容易ではありません。そこで私は止まってしまいました。二〇〇七年のことです。読字は人の考え方も変えられることについて、研究界の洞察を語るという自分に課した役割が、私の理解のおよばないところに行ってしまったのです。

当時、デジタル読字脳の形成については、ほとんど研究されていませんでした。一日六〜七時間（いまや多くの若者にとってこの数字はほぼ二倍）、デジタル中心の媒体にどっぷり漬かりながら読字を学習するとき、子ども（あるいは大人）たちの脳内で何が起きているか、重要な研究はありませんでした。読字がどう脳を変えるか、可塑性のおかげで脳は特定の書記体系（たとえ

ば英語か中国語か）のような外的要因によって形成されることを、私は知っていました。ウォルター・オングやマーシャル・マクルーハンのような過去の学者とちがって、私はこの適応性のある回路構造に対する媒体（たとえば本か画面か）の影響に目を向けたことがあります。しかし『ブルーストとイカ』の執筆を終えるまでに、私は変わりました。デジタル媒体固有の特徴によって読字脳の回路がどう変わるか、とくに子どもや若者たちでどう変わるかに夢中になったのです。

読字能力はそもそも生得ではなく文化的なものだということ——読字に関する最初の単純そうな事実——は、そのような回路のための遺伝的プログラムを、幼い読み手が備えているということです。脳の読字回路は、自然な要因と環境要因の両方によって形成され、発達していきます。読字力を習得して伸ばすための媒体も、その要因のひとつです。読む媒体それぞれに、ほかより有利な認知プロセスがあります。そのため幼い読み手は、完全にでき上がったエキスパート読字脳ならば一般に統合されている、複数の深い読みプロセスすべてを構築していけるかもしれません。または、未熟な読字脳がその発達途中で「ショートする」かもしれません。あるいは、異なる回路にまつたく新しいネットワークを獲得するかもしれません。幼い子どもの読字回路の形成をどのプロセスが支配するかによって、人がどう読み、どう考えるかに、大きな差が生まれるでしょう。



このことは私たちをいま現在へと導き、デジタル環境で育つ子どもたちにとって、そして私たち自身にとつての、もつと具体的な難しい疑問を投げかけます。新たな読み手は、デジタルメディアで重視される新しい認知能力を吸収し獲得しながら、印刷ベースの媒体によって育まれる、もつと時間のかかる認知プロセスを発達させるのでしょうか？ たとえば、デジタルフォーマットでの読字と、ソーシャルメディアからバーチャルゲームまでさまざまなデジタル経験に毎日没頭することが組み合わさると、深い読みの要素である批判的思考、個人的内省、想像、共感のような、ゆつくりした認知プロセスの形成が妨げられるのでしょうか？ 注意をそらされるような刺激をたえず与えられ、なおかつさまざまな情報源にすぐにアクセスできると、幼い読み手は自分自身の知識を蓄えたり、自分自身で批判的に考えたりする気をなくするのでしょうか？

言い換えれば、誰にもそのつもりはなくても、現代の若年者が知識のサーバーにますます依存するようになることは、子どもが自分自身で考えて想像したいと思う気持ちだけでなく、未熟な脳が自分自身で築く知識の基礎に対しても、最大の脅威になるのでしょうか？ それとも、そのような新しいテクノロジは、これまで以上に精緻な認知作用と想像力へのまさに最高の橋渡しをしてくれて、そのおかげで子どもたちは、私たちがいまこの瞬間には思いつくことさえできない新しい知識の世界へと飛び込むことができるのでしょうか？ 子どもたちは

まったく異なる脳回路を発達させるのでしょうか？ もしそうなら、その異なる回路は社会にとつてどんな意味があるのでしょうか？ 回路の多様性そのものは、みんなのためになるのでしょうか？ 読み手個人は、さまざまな書記体系を読むバイリンガルの人と同じように、さまざまな回路を獲得できるのでしょうか？

いろいろな媒体が読字脳の獲得と維持におよぼす影響を、体系的——認知的、言語学的、生理学的、そして情緒的——に調べることは、とりわけ重要な能力を、若年層だけでなく私たち自身も確保するための最善の準備です。脳の回路に新しい次元の認知と知覚を加えるとき、現在の熟練した脳が認知作用に与えるきわめて重要な貢献を理解する必要があります。熟練した読字脳の形成や維持に対する二者択一のアプローチは、次世代や私たち自身のニーズを満たすのに十分ではありません。関連する問題は、単純に印刷ベースとテクノロジーベースの媒体の差にまとめることはできません。未来学者のファン・エンリケスとステイヴ・ガランズが『自分自身を進化させる——自然でない淘汰とランダムでない突然変異が地球上の生命を変えらる』に書いているように、私たちには自然主導というより人間主導の進化をとげる選択肢があります。その選択肢は、重要な変化に何が関与しているかを、立ち止まってきちんと理解してはじめて明確になります。私はこれから読んでいただく手紙のなかで、みなさんと対話をしながら、読む脳の変化が後もどりでできなくなるほど深く染み込む前に、私たちの目の前にある問

題と選択肢に関心を向ける時間をつくりたいのです。

違和感があるかもしれませんが、刻一刻と変化している未来についての問題に取り組むために、私は手紙形式の本という、かなり変わった時代錯誤でさえある昔ながらのジャンルを選びました。その理由は、読者と著者両方としての私の経験にあります。手紙は脳に一息つかせるような感じで、私たちは互いに考え合い、運が良ければ、特別な種類の出会いを経験することができます。それはブルーストが「コミュニケーションを实らせることのできる奇跡」と呼ぶもので、椅子から立ち上がらなくても起こるのです。若いころには、この手紙形式を具現化した作品としてリルケの『若き詩人への手紙』（新潮文庫ほか）におおいに影響を受けました。しかし年を取って私がとくに感動したのは、その手紙の叙情的な言葉ではなく、会ったこともない詩人の卵に対する、彼のこのうえないお手本のような思いやりです。その詩人志望の若者フランチ・クサーファ・カプスは、彼が手紙だけを通じて気づかうようになった人物です。二人とも手紙のやり取りによって変わったことはまちがいないと思います。読者にとってこれほど明確な説明はあるでしょうか？ 著者にとってこれほど良いモデルはあるでしょうか？ 私たちにとつても同じでしょう。

私はイタロ・カルヴィーノの『アメリカ講義——新たな千年紀のための六つのメモ』（岩波文庫）からも、同じように影響を受けました。ただし彼のメモは従来の「手紙」の概念を超越

しており、たいへん残念ながら未完です。手紙もメモも、多くの人にとつて論じるには重すぎる問題に、カルヴィーノが重視する「軽さ」をもたらす形式です。手紙なら、差し迫った表現をとる場合でも、考察を軽妙なものにすることができずし、著者と読者の真の対話の基礎になる関係をつくり出せませす——同時に、あなたのなかに新しい思考へのはずみがついて、私自身とは異なる方向に進むでしょう。

面白いことに、私はしばらく前からそのような対話にかかわっています。『ブルーストとイカ』を書いたあと、あらゆる立場の読者からたくさんの手紙を受け取りました。自著の読者を意識する著名な作家たち、ボストンの教育病院の医学生について心配する神経外科医、さらにはマサチューセッツ州の試験で私の本の一節を読まれた高校生もいます。自分たちの世代について私が心配していることを知って学生たちが驚いたというのは、私にはうれしい反響でした。そのような手紙は、読書の来歴と科学に関する本として始まったものが、いまや現実となっている問題についての教訓になったことを示しています。手紙を書いてくださった方々が取り組んだおもしろなテーマをじっくり考えるところという行為のおかげで、私は本書に収める手紙それぞれのテーマを選び、さらにはこの形式を選択することができました。

私は本書で、自分の過去の研究すべてよりはるか先に踏み込みたいと思っています。とはいえ、手紙それぞれに盛り込まれる情報はすべて、直近の論文や著書からの研究結果をはじめ、

私が以前に行なったことであり、長大な「注」[[www.intershift.jp/yomu.html](http://www.intershift.jp/yomu.html)]よりダウンロードいただけます」]でそのすべてを紹介し、本文で取り上げた問題の一部を詳しく述べています。第二の手紙は、その最大規模の研究をベースにしていますが、私からあなたへの手紙のなかで最も気楽なものでもあり、読字脳に関する現在の知識を、誰はばかることなく思うままに概観しています。なぜ、読字脳回路の可塑性が私たちの思考をますます複雑にするのか、なぜ、どうして、この回路が変化しているのか、両方をここで明らかにしたいと思います。第三の手紙では、深い読みを構成する基幹プロセス——読み手の共感し推論する能力から批判的分析と洞察そのものまで——へ、あなたをご案内します。ここまで最初の三通の手紙は、印刷と画面をはじめさまざまな媒体での読字の特徴が、脳の回路の柔軟なネットワークだけでなく、私たちがいま何をどう読むかにも反映され始めていることを考察するための、共通の基盤になります。

私たちの読字脳の可塑性が意味するところは、単純でも一時的でもありません。私たちが何をどう読むかと何が書かれるかの関係は、今日の社会にとってきわめて重要です。過剰な情報をたえず突きつけられる環境にあつて、多くの人々は、楽に消化でき、あまり難しくなくて、あまり知性を必要としない情報の詰まった、なじみの貯蔵庫に引きこもりたい衝動に駆られます。毎日押し寄せる一目で読めるサイズの情報で知識が得られているという錯覚が、複雑な現実の批判的分析をしのごおそれがあります。第四の手紙で、私はこの問題に真正面から向き合

い、民主的社会がそのような批判能力を邪魔されずに使えることにどれだけ依存しているか、しかもその能力は各人のなかでいかに急速に知らぬまに衰えるおそれがあるかを論じます。

第五から第八の手紙で、私は世界中の未来の子どもたちのために「読字戦士」に変身します。そして多岐にわたる関心事について述べます。知能、社会的情緒、倫理観の形成において読字が果たすさまざまな役割を維持することも重要です。消えつつある子ども時代の様相も心配です。もつと具体的な心配事を抱える多くの親や祖父母から、カントの三つの問いのようなことを訊かれます。私たちは何を知りうるか？ 何をなすべきか？ 何を望みうるか？ 第六から第八の手紙で、私は発育に関する提案を行ない、三つの問いそれぞれについて最善の考えを示し、それが最終的にバイリテラシーの読字脳を構築するためのかなり意外な計画になります。

その目的に向けて、あれかこれか二者択一の解決策は本書のどこにも提示されません。私の研究の最も重要な最新の副産物のひとつは、グローバル・リテラシーに向けた取り組みに関係しており、とくに学校がない地域や不十分な地域の子どもたちの読み書き能力を改善するひとつの手段として、デジタルタブレットの設計を私は公に支持し、支援しています。私がデジタル革命に反対だと思わないでください。それどころか、どこに住んでいるにせよすべての子どもたちに、媒体を問わず深く上手に読む準備をさせるつもりなら、さまざまな媒体の影響に関

してどんどん知識を増やすことはきわめて重要だと考えています。

本書の手紙はすべて読者であるあなたに、ご自身のことを手始めに、関連する多くの重要な問題を考える準備をしていただくものです。最後の手紙では、変わりゆくこの時代において真の「良い読み手」は誰なのかについて考え、彼らが民主社会において果たす計り知れないほど重要な役割についてご自分で熟慮してほしいと、あなたに願います——いまこそ、そうしたいだけだと思います。本書での良い読み手の意味するところは、どれだけうまく単語を解読するかとは関係ありません。良い読み手と切り離せないのは、ブルーストがかつて読むという行為の神髄だと表現したこと、つまり著者の知恵を越えて自分自身の知恵を発見することに、忠実かどうかなのです。

良い読み手になるための近道はありませんが、それを推進し支える生活はあります。アリストテレスいわく、良い社会には三つの生活がある。知識と生産の生活、ギリシャ人の余暇に対する特別な関係があつての楽しみの生活、そして最後に観想・熟考の生活。良い読み手もそうです。最後の手紙で私は、良い読み手が——良い社会と同様——アリストテレスの三つの生活それぞれを、実際にどう送るかを詳しくお話します。ただし、第三の観想・熟考する生活は現代文化において日々脅かされていますが。この形式の読みこそ、次世代の人々が私たちの誰も想像さえできない世界で必要とする、独特の自立した精神生活のための基盤を与える絶好の機

会であることを、私は神経科学、文学、および人間の発達の観点から論じるつもりです。デジタル時代に生活を豊かにする功績はいくつもありますが、その後遺症として認知と情動の変化も起こっており、それを補完し矯正する最高の手段が、現在の読字脳における洞察と熟考の根底にある広範な包括的プロセスなのです。

こうして最後の最も個人的な手紙で、あなたと私は自分自身と向き合い、良い読み手の三つの生活それぞれを送っているか、あるいは、ほとんど気づかないうちに第三の生活に入る能力を失い、そうするうちに読むことの抛りどころを失っているかどうか、問うことになります。それを検討する行為のなかで、読字脳の熟考する次元を育み守ることによって、人類の未来は最高のかたちの集団的知性、共感、および知恵をうまく維持し、伝えることができるのだと、述べるつもりです。

周知のとおりカート・ヴォネガットは、社会における芸術家の役割を炭坑のカナリアにたとえました。どちらも人々に危険の存在を警告します。読字脳は私たちの心のカナリアです。その脳が私たちに教えることを無視するならば、私たちは最悪の愚か者です。

私の意見にはあなたが賛成できない部分もあるでしょう。それで当然です。私は聖トマス・アクイナスと同様、意見の相違を「鉄が鉄をもつて研磨する」場所と見ています。それが本書に収めた手紙の第一の目標です。つまり、私の最善を尽くした思考とあなたのそれとが出会

い、ときにぶつかり、その過程で互いに研磨し合う場所になることです。第二の目標は、子孫のための未来を築くにあたつて、あなたがもっている選択肢を理解するのに必要な証拠と情報をおあなたが手に入れることです。そして第三の目標は、まさしくプルーレストが自分の本の読者それぞれに望んだことです。

私には彼らが「私の読者」ではなく、自分自身の読者であり、私の本はたんなる拡大鏡であるように思えた。……私は彼らに、彼ら自身の内にあるものを読む手段を提供したのだ。

心をこめて、著者より